

留学体験記（2018 年前期）

人文学部（現人文社会科学部）3 年 戸田成美

留学先：教皇庁立ペルー・カトリカ大学

留学期間：2018 年 3 月～2018 年 12 月

私は 2018 年 3 月から同年の 12 月までの 10 か月間、ペルーの首都リマに位置する教皇庁立ペルー・カトリカ大学に留学していました。専攻であった文化人類学のほか、関心を持っていたアンデス考古学を学ぶこと、そしてそれらをより理解するためのスペイン語の習得が目的でした。留学を決心してからスペイン語を学び始めたことや、別途履修登録していた学芸員の授業と聴講であったスペイン語の授業の時間割が重なっていたこともあり、私は日本でスペイン語の基盤を築くことができないままペルーへと出発してしまいました。当然到着した頃はほとんどスペイン語が理解できず、宿泊先では日系の日本語が分かるペルー人や日本人と日本語で、大学内ではカトリカの現地の学生らと英語で話していた時期がありました。また、同じくカトリカ大学へ留学した日本人の学生らは私以外皆スペイン語を専攻していたため、ペルー人との会話を難なくこなしており、それから先の一層の不安を感じました。

彼らでさえ「難しい」と口をそろえて言っていた大学での授業はもちろん私にとっても困難を極めるものでした。授業を毎回録音し、帰宅後もその音源を聞いて、分からない単語は辞書を引き覚える、という繰り返しと授業で配布される資料との照らし合わせで何とか授業内容を詰め込んでいました。しかし、一番参考になったものは同じ授業に出席している現地の学生たちのノートでした。彼らにノートを見せてもらうために話しかけたことから友人となり、日本に帰国した現在でも交流が続いているなど、かけがえのない人々と出会うことができました。その時自分から話しかけられたことが何よりも嬉しく、スペイン語を学ぶうえでの動力源となったことを覚えています。週に一度考古学を研究されている先生の研究室にお邪魔して、研究室に配属されている院生との交流を図ったり、授業で分からなかったところを教えてもらったりもしました。研究室には図録でしか見たことの無かったような本物の古代アンデス文明の土器が数多く並んでおり、学習意欲を刺激されました。

また、大学での授業のほか、スペイン語を習得するために大学附属の語学学校へも通っていました。別途有料でしたが、同じくスペイン語を学ぼうとしていた中国人や韓国人、アメリカ人、ロシア人、ポーランド人など、様々な文化圏の人々と出会うことができ、ペルーにいながらペルー以外の国々の文化についても知ることができました。

これらの経験を含め、ペルーではさまざまな出会いがありました。留学先での様々な意見をもった人たちとの交流は、自分について見つめなおす機会にもなり、自分の多様性を知ることにつながりました。留学するうえで異文化を体験し、その中で生活する人々と関わっていくことは必然です。しかしその体験や交流によって「他者」を知ること「自己」を知ることにつながっています。留学を通じて何を得るかは人それぞれかもしれませんが、「他者から見た自己」を浮き彫りにすることにおいて、留学ほど適した条件は無いのではないかと思います。



↑日本語の授業の皆さんとの写真



↑ラルコ博物館に展示されている古代葬儀用装具一式



↑トルヒーヨの「月の神殿(ワカ・デ・ラ・ルナ)」



↑リマに所在する教会